アジアにおける「無形文化遺産の保護に関する条約」と国際支援について

Promotion of the Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage in Asia

大 貫 美佐子

2009年9月28日(月)から10月2日(金)まで、アラブ首長国連邦のアブダビで開催された「無形文化遺産の保護に関する条約」第4回政府間委員会において、「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」(代表リスト)の提案案件についての初めての審議が行われ、76件について「記載」の決議がなされました。また、「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表」については、12件が記載されました¹⁾。今後、この条約は有形の世界遺産とは異なる“生きた文化遺産”の保護について、様々なありかたを模索しながら挑戦していくことになります。

「無形文化遺産の保護に関する条約」は、2003年のユネスコ総会において採択され、その後2006年4月に発効、12月28日時点で118か国が批准しています。条約の発効に先駆けて、ユネスコは「人類の口承及び無形文化遺産の傑作の宣言」を2001年より3回にわたって実施、90件を選定しました。これらは全て、代表リストに移行されているので、現時点での同リスト総数は166件となっています。

条約の定義では、無形文化遺産は(a)口承による伝統及び表現、(b)芸能、(c)社会的慣習、儀式及び祭礼行事、(d)自然及び万物に関する知識及び慣習、(e)伝統工芸技術、とされています²⁾。この条約が強く意識しているのは、継承しているコミュニティが保護に深く関与していることです。また多くの無形文化遺産は発展途上国に集中しており、しかも共通の問題として、若者の都市への人口流出、地方の過疎化現象、戦争・紛争による継承者の減少、市町村合併、観光化による変容、低い識字率、人材不足、深刻な問題に直面しています。財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)³⁾では、1971年の設立以来、アジア太平洋地域のユネスコ加盟国とネットワークを強化しつつ、有形、無形文化遺産の保存のために独自の事業を展開しております。ACCUの国際協力の特徴は、40年にわたり構築されたアジア地域の人材ネットワークを活用したプログラム開

発と実施、ユネスコとの確立した協力体制にあります。そのプログラム実施には大きな特徴があり、現地のニーズと期待される効果を各国と共に考え、共同でプログラムを実施し、そして徹底した教材制作と現地語版の普及をネットワーク上でやっていることです。年度ごとに事業予算をたて、事業を計画したのでは期待される成果がその都度得られず、会議をいくつ重ねてもその場限りの議論で終わってしまいます。そうした事態をできるだけ避けるために、様々な工夫と模索を積み重ねてきました⁴⁾。1970年～80年代には口承伝統の教材化(「アジアの昔話」など)、伝統音楽の教材化(2000曲以上を収集、うち400曲を教材化)、文化活動推進セミナー、博物館活動の近代化に関する懇談会などを実施、1990年代には、無形文化遺産の記録保存巡回講師団の海外派遣事業を実施しました。特に最近の5年間は、ユネスコ本部との共催で条約の運用指針作成の基礎となる専門家会合を開催し、また、民間企業等の支援を受け、消滅あるいは継承者が途絶えかけた伝統芸能の保護と活性化に成功した事例を募集し、その事例をより多くの関係者と共有するしくみを構築することに力を注いでいます。

伝統工芸における課題もこれまで様々な点がプログラムの参加者により指摘されてきました。例えばインドネシアのパティック。研究者であり、職人でもある国立パティック研究センター所長のヘンドリ・スプラウト氏は、2008年にACCUのプロジェクトに参加しその危機を次のように述べています。「パティックの現状は、深刻である。先

MISAKO OHNUKI

ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
文化協力課長

E-mail: misakoohnuki@gmail.com

〈専門〉無形文化遺産の保護に関するア
ジア地域の国際支援、ミャン
マーの文化遺産の保護

徳島県の犬飼農村舞台にて伝統芸能を披露するキューバのコミュニティ参加者。(2009年11月ACCU第2回コミュニティワークショップにて)

祖代々伝わってきた手法として、手で一つずつ丁寧に作られていくことで生活そのものが吹き込まれていた。手描きとスタンプの方押しによる二つの作り方がある。バティックでは、防染材として蠟を使っており、その技法でないとバティックというテキスタイルにはならないが、バティック独特の模様を使ったプリントのものがこのごろ増えている。バティックを作る職人は、まず食べていかなければならないので、高く売らないといけない。そのためバティックでない文様のプリントを作るようになっていくことが危惧されている。」同氏は、三つの次世代養成活動、つまり天然染料を使った研修、(合成染料や科学染料は環境を壊すことも)、研究所での若い人たちを対象にした養成講座、そして幼稚園の子どもたちにバティックを作る道具、蠟を流し込むチャンティという道具を使って遊んでもらうことなどを提案し、活動しています。

こうした取り組みの課題や、現場で克服した問題は何であったのかを整理し、広く共有することでさらなる効果が生れます。また、貧困削減と、伝統芸能の保護がどこまで両立できるのかを考えたとき、その土地の人々が判断をするための知識と確立したノウハウのないまま、無防備に変容を受け入れたりすることの危険性も共有しなければいけ

ません。ここに、教育とのリンク、コミュニティのキャパシティ・ビルディングの必要性を感じます。私は2006年、民間企業の資金援助を受け、地方自治体などで成功した事例を集めた「無形文化遺産の保護の優良事例コンテスト」を企画し、優秀な事例を選出し、ワークショップとウェブサイトを通じてその事例を広く世界に紹介・共有しました。これにより、約70件のコミュニティの企画が提案され、ウェブ上で公開中です。今後は、その土地で長きにわたり継承されてきた伝統工芸等の保護の経験を、様々な機関や大学を通じて共有し、国際支援の活動が広がっていくことを強く希望します。

注

- 1) <http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?pg=00011>
- 2) 「無形文化遺産の保護に関する条約」第2条定義2
- 3) Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), <http://www.accu.or.jp>
- 4) ACCU 無形遺産データベース上でこれまでのプログラムと成果を2010年度末まで公開。<http://www.accu.or.jp/ich>